

報道機関 各位

令和8年10月吉日

宗教法人・高台寺

38年目の悲願。秀吉公とねね様の愛した客殿430年ぶりに復活！

高台寺客殿 完成へ

報道関係者 内見会のご案内



二の間 松の図

秀吉公とねね様の愛した「客殿」がいよいよ新しい姿で完成いたします。

客殿落慶法要(令和8年11月13日)に先立ち、報道機関の皆様に向けた内見会を下記の日程で行います。是非お取り上げ賜りたく、万障お繰り合わせのうえ、お越しをお待ち申し上げます。ご来寺いただける方は、ご予約日を担当者までお知らせいただければ幸いです。

内見日： 11月10日および11月11日

時 間： 両日とも 13時～15時

受付場所：高台寺 唐門

【本件に関するお問い合わせは】

鷲峰山 高台寺 担当：久末・森永

京都市東山区下河原町 526 電話 075-561-9966(9～17時)



客殿外観(完成前)



上段の間 白菊の図

慶長11年(1606年)高台寺は創建されました。創建当初の境内は伏見城から移築された堂宇が建ち並び、絢爛豪華な寺内景観を誇っていましたが、度重なる罹災により寺内景観は大きく変わってしまいました。高台寺では、昭和63年(1988年)10月より創建時の寺内景観を復興するため国の史跡名勝に指定されている庭園や国の重要文化財にも指定されている建築を中心に往時の姿に戻す整備計画を進めています。

■再建された客殿(小方丈)について

今回再建される客殿は、現存する表門、開山堂、観月台、霊屋、傘亭、時雨亭と共に伏見城からの移築のひとつで、伏見城内に建立された当時は、豊臣秀吉が朝鮮出兵の大名や武将との謁見や出兵の労をねぎらう大広間として利用されていたと伝わっています。

■客殿(小方丈)の建築概要■

<規模、外観>

高台寺に残る古絵図や参考文献によると創建当初の客殿の規模は、桁行13間、梁間9.5間の125坪。再建小方丈は桁行9間、梁間7間の63坪、創建時の概ね50%の大きさで計画されました。外観については、桃山時代の書院建築を基調としています。屋根については創建当初の檜皮葺きもしくは柿葺きをイメージとした銅板葺とし、入母屋造りの優しく品格のある外観を目指しました。

<創建時遺構の上に建つ>

平成31年に実施された発掘調査により確認された創建時の遺構群、再建小方丈は遺構を伝統工法である漆喰三和土を保護層として地盤補強かねて採用しています。

<伝統工法と現在在来工法のハイブリット工法>

再建小方丈は伝統技術を継承した工匠の技術により刻まれ組み上げられています。一方、現行の建築基準法に準拠した耐震基準を満足するため、目に見えない箇所耐震補強の金物や補強材料を使用しています。

<荘厳鍔金物>

現在、高台寺には創建時から残る霊屋、開山堂、観月台、傘亭、時雨亭、表門、いずれも国の重要文化財に指定されており、それぞれ往時の絢爛豪華な姿を偲ばせる鍔金物が内外に施されています。再建客殿には障壁画と共に桃山時代の特徴を再現した鍔金物が内外を飾っています。

＜莊嚴障壁画＞

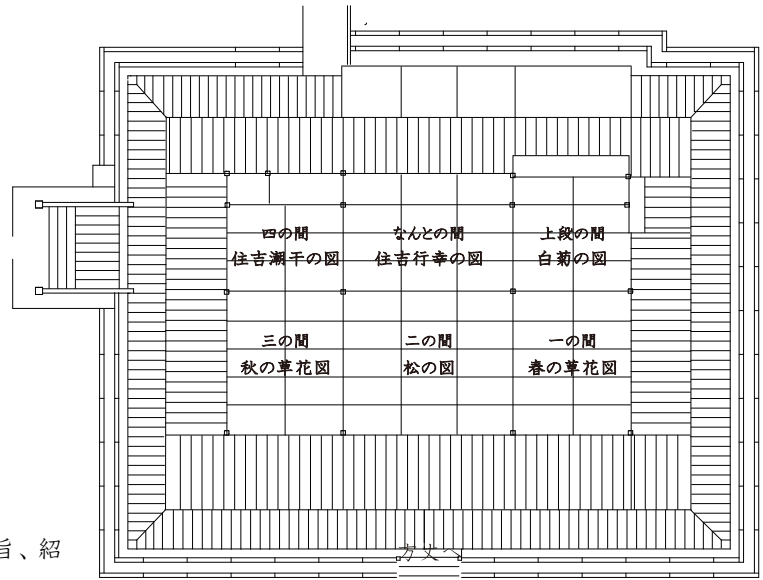
創建時の客殿は、諸大名を集め謁見の場、祝賀の宴が開かれた絢爛豪華な設えであったと伝わり、襖絵には狩野永徳はじめ土佐光信、狩野派の絵師などにより贅を尽くした絵が描かれていました。

再建の客殿では当時の姿を可能な限り文献などにより推考し、京都画壇の志村正画伯により障壁画を新しく制作されました。

高台寺客殿(大方丈・小方丈)について
下記のように紹介されています。

山州名跡志(正徳元/1711 年刊行)

「此方丈、秀吉公朝鮮征伐給ひて、
御凱陣の祝筵饗応に設給ひし殿舎なり。
他にありしをここに遷す。」



拾遺都名所図会

(天明七/1787 年秋に刊行)

文禄の役後に開かれた宴の建物であった旨、紹介されています。

「小方丈 上段は光明皇后の白菊の屏風をうつし、松の間には四季の松、左右の間には草花を画く、これみな永徳の筆なり。又上段にある翠簾下の屏風には紅白の梅を画く、是古法眼元信の筆なり。住吉行幸の図の屏風は土佐光信の画なり。又住吉汐干の景は土佐又平の筆なり。これらの屏風は小方丈に常に出す。」

なんどの間 住吉行幸図



住吉大社は211年神功皇后が住吉大神を鎮斎して以来1800年にわたり、多くの天皇が行幸し、また大勢の公卿や武将が参拝していました。住吉大神は穢れ祓いの神であり、祇園祭では最後尾に巡行する船鉾(先祭)や大船鉾(後祭)の祭神です。天皇のみならず武将も多く参詣し、豊臣家とも所縁が深い神社でした。秀吉公は母、大政所の延命治病の祈願を行い、秀頼公は所願成就を祈願した連歌興行を行いました。このほか秀頼公は慶長11年の社殿造営をはじめ、石舞台や楽所、南門など次々と寄進をされました。また客殿の「住吉行幸図」にも描かれている反橋(太鼓橋)は淀殿が秀頼の成長を祈願し寄進したものです。